

令和元年5月16日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02465

研究課題名(和文) ロマンズ語における定の決定詞の対照研究 決定詞体系の再構築にむけて

研究課題名(英文) A contrastive study of Romance definite determiners

研究代表者

藤田 健 (FUJITA, Takeshi)

北海道大学・文学研究院・教授

研究者番号：50292074

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、スペイン語・フランス語・イタリア語・ルーマニア語における定冠詞と他の決定詞との対応を分析した。定冠詞に対してゼロ冠詞が対応している比率を見ると、羅語が最も高く、西語、伊語、仏語の順に続く。この事実は、仏語の冠詞体系が最も発達しており、羅語が最も未発達であることを示している。

定冠詞に対して所有形容詞が対応している比率を見ると、羅語が最も低く、西語、伊語、仏語の順に続く。この傾向を、冠詞体系の発達具合と関連付けて考えると、最も発達している言語ほど所有形容詞を用いる頻度が高くなっていると言える。なお、指示形容詞と不定冠詞については、有意な差は認められなかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、従来個々の言語単位で行われてきた定冠詞を中心とする決定詞の分析を、ロマンス諸語に属する四言語の対照研究という独自の的方法論で進めた点にある。他の言語との比較対象によってはじめて明らかになった各言語の特徴を提示し、それぞれの言語の文法研究に資するものである。

社会的意義としては、本研究の成果をロマンス諸語の冠詞を紹介する一般書として刊行し、冠詞という日本人にとって難しい文法項目についてより深い理解を促すことができるという点があげられる。現在原稿を執筆中であるが、もっともなじみのある英語の冠詞との比較対象も含めて、広い意味での外国語教育という側面で貢献できると考えている。

研究成果の概要(英文)：In this study the correspondences between the definite article and other determiners in Spanish, French, Italian and Romanian are analyzed. The cases where the zero article corresponds to the definite article in other languages are most observed in Romanian and least in French, with Spanish and Italian in the intermediate positions on the scale in this order. This fact shows that the French article system is the most developed among the four languages, and the Romanian the least developed.

The cases where possessive adjectives correspond to the definite article are least observed in Romanian and most in French. Taking into account the above observation, it can be said that the more developed the article system is in a language, the less possessive adjectives are used. Significant characteristics are not found for the correspondences of the definite article with demonstrative adjectives or the indefinite article.

研究分野：言語学

キーワード：ロマンス語 フランス語 スペイン語 イタリア語 ルーマニア語 定冠詞 ゼロ冠詞 所有形容詞

## 1. 研究開始当初の背景

決定詞とは名詞句の指示対象の同定可能性を標示する文法カテゴリーであり、その中で定の決定詞は受信者による指示対象の同定が可能であると考えられる名詞句を標示する機能を担う要素である。代表的な要素として挙げられる定冠詞の他に、指示形容詞及び所有形容詞も含まれる。決定詞はあらゆる言語に見出される文法カテゴリーで、多くの言語において意味論・統語論の両面で研究の対象とされてきた極めて重要な要素であると言える。ロマンス語学においては、フランス語の Wagner et Pinchon(1991)、スペイン語の Hernández Alonso(1984)、イタリア語の Andorno(1999)、ルーマニア語の Lombard (1974)をはじめとして様々な興味深い分析が提示されてきているが、対照言語学的観点からの分析はあまり進んでいるとは言えなかった。

当該四言語に関して極めて興味深いのは、同じ系統に属するにもかかわらず決定詞の分布に差異が見られるという点である。本研究は、同系統の言語でありながら異なる体系が見られる定の決定詞について、表面的なものにとどまらない総括的な対照分析を行うものである。このような視点は従来の研究には欠けていた部分であると言える。

## 2. 研究の目的

本研究は、フランス語・スペイン語・イタリア語・ルーマニア語の間の定の決定詞の機能の差異を明らかにすることを目的とするものである。具体的には、一つの原典テキストとその他言語への翻訳とを対照し、異なる決定詞が用いられている用例を数多く収集し、それをもとに言語間の体系の違いを分析した。特に着目すべき点は三点挙げられる。一つは、ロマンス諸語における定の決定詞の体系において、定冠詞と指示形容詞がどのような関係にあるかという点である。両要素が完全な相補分布をなす言語と共起が可能である言語において、機能・分布に関してどのような相違が見られるのかを観察する。この分析によって、当該言語間の定の決定詞の体系的相違点が明確になる。二点目は、所有形容詞と他の定の決定詞との関係である。所有形容詞は人称代名詞としての機能も併せ持っているため、他の決定詞とは異なる特性を有する要素である。定の決定詞という位置づけにおいて、この要素がどのような位置を占めるかを明らかにする。最後は、定冠詞と不定の決定詞及びゼロ冠詞との関係である。定冠詞が不定の決定詞・ゼロ冠詞に対応している例を詳細に分析することにより、定の決定詞の機能の範囲を明確に提示することが可能となる。以上の視点から、四言語における定の決定詞の体系を再構築することを目指した。

## 3. 研究の方法

四言語の中で二言語間の対照分析を基本にすえて順次作業を進めた。分析の核として位置付けたのは、定の決定詞の中で最も使用頻度が高く、機能も多岐にわたる定冠詞である。初年度には、スペイン語を中心に据え、他の三言語との対照を順次行っていった。これは、一つの言語を固定することによって、二言語間の対照研究をより効率的に行うことが可能となるからである。スペイン語の原典テキストとイタリア語への翻訳テキスト、イタリア語の原典テキストとスペイン語への翻訳テキストをそれぞれ比較検討した。次年度以降、同様の作業を他の言語についても進めていった。この作業を行うにあたって対象とするのは文学作品である。扱う内容が多岐にわたり、文語表現と口語表現のいずれもが用いられるという特徴があるからである。特に、定の決定詞の分析においては文語に多く見られる照応機能と口語に多く見られる直示機能の両方を扱う必要があるため、文学テキストは極めて有益である。このため、本研究では複数の作家の作品を分析対象のテキストとして選択し、当該要素の対応関係について調査を進め、分析を行った。

四言語の定の決定詞に関するデータが出揃った段階で、四年間の定の決定詞に関するそれぞれの研究成果を整理し、四言語における各要素の相違点を包括的に提示する作業を行った。

## 4. 研究成果

まず二言語間の分析結果から述べる。フランス語とスペイン語における定冠詞の分布と他の要素との対応関係をもとにして、両言語における定冠詞の特性を対照的に考察した結果として、両言語における共通点と相違点は以下の通りである。

- 共通点 (1) 指示性の高さという点において性質が異なる、指示形容詞との機能分化が明瞭である。  
(2) 定性の値が異なる不定冠詞との機能分化が比較的明瞭である。  
(3) ゼロ冠詞との交替が一定の割合で観察される。その中で、前置詞の目的語となっている例の割合が最も高い。
- 相違点 (1) スペイン語の定冠詞がフランス語の所有形容詞に対応する例が一定の割合で観察

される。これに対して、フランス語の定冠詞がスペイン語の所有形容詞に対応する例は少ない。このことから、スペイン語の定冠詞はフランス語の所有形容詞が担う機能の一部を担っていると言える。

- (2) 定冠詞にゼロ冠詞が対応している例の中で、スペイン語では直接目的語の割合が高いのに対して、フランス語ではその割合が低い。逆に、フランス語では付帯状況表現と並列表現の割合が比較的高いのに対し、スペイン語ではほとんど見られない。

以上の結果から、両言語の定冠詞は基本的な性質を共有しているものの、一部でその機能に相違点があると言える。特に、所有を表す機能に関する両言語の定冠詞の違いは従来指摘されることの少なかった特徴であり、文法機能について分布に偏りが見られることは言及されていない言語事実である。また、スペイン語ではフランス語よりもゼロ冠詞の生起が多く観察されるという筆者の従前の研究における特徴付けが、本調査によって再確認された。スペイン語においてゼロ冠詞が対応している例の割合が7.2%であるのに対して、フランス語の該当する例の割合は3.9%であることがこの傾向を表している。この特徴は、同じロマンス諸語に属する両言語の相違点として注目すべき点であると言える。ただし、今回の調査で新たに分かったことは、フランス語においてもゼロ冠詞の生起が決してまれではないという事実である。3.9%という数値は他の要素、例えば指示形容詞や不定冠詞の生起例の割合に比べると明らかに高い数値であり、フランス語においても一定の環境において比較的指示性の高い要素を指示する名詞がゼロ冠詞を伴うことが示されたと言える。

フランス語とイタリア語の分析結果について、両言語における共通点と相違点の中で特筆すべきは以下の通りである。

- 共通点** 定性の値が異なる不定冠詞との機能分化がある程度なされているが、定冠詞に不定冠詞が対応している例が一定数観察される。このことから、定冠詞と不定冠詞の間に若干の機能的連続性が存在すると考えられる。
- 相違点** (1) イタリア語の定冠詞がフランス語の所有形容詞に対応する例が一定の割合で観察される。これに対して、フランス語の定冠詞がイタリア語の所有形容詞に対応する例は少ない。このことから、イタリア語の定冠詞はフランス語の所有形容詞が担う機能の一部を担っていると言える。
- (2) フランス語の定冠詞にイタリア語のゼロ冠詞が対応している例の方が、イタリア語の定冠詞にフランス語のゼロ冠詞が対応している例よりも多い。
- (3) イタリア語の定冠詞にフランス語の不定冠詞が対応している例の方が、フランス語の定冠詞にイタリア語の不定冠詞が対応している例よりも多い。

以上の結果から、フランス語とイタリア語の場合も、両言語の定冠詞は基本的な性質を共有しているものの、一部でその機能に相違点があると言える。特に、所有を表す機能に関する両言語の定冠詞の違いは従来指摘されることの少なかった特徴であり、文法機能について分布に偏りが見られることは言及されていない言語事実である。また、イタリア語ではフランス語よりもゼロ冠詞の生起が多く観察されるという筆者の従前の研究における特徴付けが、本調査によって再確認された。

スペイン語とイタリア語の分析結果について、特筆すべきは以下の点である。

- (1) 定性という点で共通の性質をもつ指示形容詞との対応例は、両言語において少なく、定冠詞と指示形容詞の機能分化はかなり明確であると言える。また、定冠詞に指示形容詞が対応する場合、両言語において話者から遠い位置にあるものを指示する形容詞が用いられるという共通の傾向がある。
- (2) 定性に関して対立する性質をもつ不定冠詞との対応例は、両言語において少ない。
- (3) 所有形容詞との対応例は、イタリア語に比してスペイン語においてかなり高い比率を示す。この事実は、イタリア語の所有形容詞がスペイン語とは異なり、決定詞の位置を占めていないという統語的特徴に起因すると考えられる。
- (4) ゼロ冠詞との対応例は、いずれの言語においてもかなりの比率で観察される。この事実は、両言語において定冠詞とゼロ冠詞との間にある程度の機能的連続性があることを示唆している。特に分布上目立つのは前置詞の目的語であるが、これは前置詞が、補語としてとる名詞と統語的にも意味的にも緊密な関係にあることに起因すると考えられる。また、イタリア語では場所を表す前置詞句にゼロ冠詞が多く観察されるが、スペイン語ではより広い意味領域で観察される。直接目的語にゼロ冠詞が生起する例も、イタリア語よりスペイン語の方がより多くのタイプの表現が見られる。このことは、イタリア語よりもスペイン語の方がゼロ冠詞が用いられる範囲が広いという傾向によるものであると考えられる。

定冠詞とゼロ冠詞との関係、中でも前置詞の目的語において顕著な特徴が見られるという点は、従来指摘されていないものである。本調査で改めて明らかになったのは、定冠詞を含む決定詞の体系を考察する上で、ゼロ冠詞の位置づけが重要であるという点である。

フランス語とルーマニア語の分析結果について、両言語における共通点と相違点の中で特筆すべきは以下の通りである。

**共通点** 定性の値が異なる不定冠詞との機能分化がある程度なされているが、定冠詞に不定冠詞が対応している例が一定数観察される。このことから、定冠詞と不定冠詞の間に若干の機能的連続性が存在すると考えられる。

**相違点** (1) ルーマニア語の定冠詞がフランス語の所有形容詞に対応する例が一定の割合で観察される。これに対して、フランス語の定冠詞がルーマニア語の所有形容詞に対応する例は少ない。これは、ルーマニア語において所有の与格という構文が頻繁に用いられるという統語的特徴によるところが大きい。与格人称代名詞が生起しない例も多く見られることから、ルーマニア語の定冠詞はフランス語の所有形容詞の機能の一部をになっていると言える。

(2) フランス語の定冠詞にルーマニア語のゼロ冠詞が対応している例の方が、ルーマニア語の定冠詞にフランス語のゼロ冠詞が対応している例よりも多い。

(3) フランス語のゼロ冠詞が対応している例が一定数見られるのは、ルーマニア語の定冠詞が格標示の機能、及び修飾要素が後続することを明示する機能を担うという、形態統語的な特徴によるところが大きい。

特に、所有表現についてはルーマニア語の特異性が従来の研究において指摘されていたが、本調査でそれが統計的に証明されたことになる。また、ルーマニア語ではフランス語よりもゼロ冠詞の生起が多く観察されるという特徴が確認された。

スペイン語とルーマニア語の分析結果について、特筆すべきは以下の点である。

- (1) スペイン語の定冠詞にルーマニア語のゼロ冠詞が対応している例の方が、ルーマニア語の定冠詞にスペイン語のゼロ冠詞が対応している例よりも多い。
- (2) スペイン語のゼロ冠詞が対応している例が一定数見られるのは、ルーマニア語の定冠詞が格標示の機能、及び修飾要素が後続することを明示する機能を担うという、形態統語的な特徴によるところが大きい。
- (3) ルーマニア語の定冠詞がスペイン語の所有形容詞に対応する例が一定の割合で観察される。これに対して、スペイン語の定冠詞がルーマニア語の所有形容詞に対応する例は少ない。これは、ルーマニア語において所有の与格という構文が頻繁に用いられるという統語的特徴によるところが大きい。与格人称代名詞が生起しない例も多く見られることから、ルーマニア語の定冠詞はスペイン語の所有形容詞の機能の一部をになっていると言える。
- (4) スペイン語の指示詞は三項体系であるために、人称代名詞の体系と密接な関連性をもつことから、遠称の指示形容詞と定冠詞の機能が近く、二項体系のルーマニア語の指示形容詞よりも対応関係が多く見られる。

ルーマニア語ではスペイン語よりもゼロ冠詞の生起が多く観察されるという特徴が、調査によって確認された。これとは別に、スペイン語ではゼロ冠詞の生起が比較的多く観察されるという事実が再確認された。他の要素、例えば指示形容詞や不定冠詞の生起例の割合に比べると明らかに高い数値を示しており、スペイン語においても一定の環境において比較的指示性の高い要素を指示する名詞がゼロ冠詞を伴うことが再確認されたと言える。さらに、指示形容詞と定冠詞の親和性がルーマニア語に比してスペイン語においてより高いことが示されたのも重要な発見と言える。

イタリア語とルーマニア語の分析結果について、特筆すべきは以下の点である。

- (1) ルーマニア語の定冠詞がイタリア語の所有形容詞に対応する例が一定の割合で観察される。これに対して、イタリア語の定冠詞がルーマニア語の所有形容詞に対応する例はそれほど多くはない。ルーマニア語の定冠詞はイタリア語の所有形容詞の機能の一部をになっていると言える。
- (2) イタリア語の定冠詞にルーマニア語のゼロ冠詞が対応している例の方が、ルーマニア語の定冠詞にイタリア語のゼロ冠詞が対応している例よりも多い。
- (3) イタリア語のゼロ冠詞が対応している例が一定数見られるのは、すでに述べたルーマニア語の形態統語的な特徴によるところが大きい。これ以外の場合は、前置詞の目的語と名詞文という特定の統語的環境において一定数観察される。

ルーマニア語ではイタリア語よりもゼロ冠詞の生起が多く観察されるという特徴が確認された。ただし、イタリア語においてもゼロ冠詞の生起が決してまれではないという事実が、ルーマニア語と比べても確認された。イタリア語においても一定の環境において比較的指示性の高い要素を指示する名詞がゼロ冠詞を伴うことが再確認されたと言える。

最後に、イタリア語・ルーマニア語・フランス語・スペイン語における定冠詞と他の決定詞との対応に関して、各言語間に見られる特徴を総括する。

まず、定冠詞に対してゼロ冠詞が対応している比率を見ると、ルーマニア語がどの言語と比較しても高くなっており、定である名詞句にゼロ冠詞を用いる傾向が最も高いと言える（本研

究成果によるデータでは、対フランス語 + 10.9 ポイント、対スペイン語 + 10.6 ポイント、対イタリア語 + 9.8 ポイント)。続いて高いのはスペイン語で、ルーマニア語以外のいずれの言語よりも比率が高くなっている(対フランス語 + 3.3 ポイント、対イタリア語 + 2.7 ポイント)。これに続くのがイタリア語で(対フランス語 + 3.2 ポイント)、フランス語がいずれの言語と比較しても最も低くなっている。すなわち、以下に示される関係となっている。

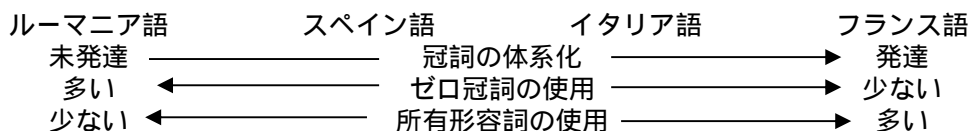
ルーマニア語 > スペイン語 > イタリア語 > フランス語

この事実は、それぞれの言語の特徴の差を反映していると考えられる。まずフランス語は、部分冠詞という要素をもつことに象徴されるように、四言語の中で最も冠詞体系が発達しており、冠詞が生起する比率が高いと言える。イタリア語も完全な形ではないにせよ部分冠詞をフランス語と共有しており、フランス語ほどではないが冠詞体系が発達しているためにこの位置にあると言える。スペイン語は部分冠詞をもたないという点において上記二言語よりも冠詞体系が発達しておらず、その分ゼロ冠詞の使用が多くなると考えられる。最後に、ルーマニア語は修飾要素を伴わない名詞が前置詞に支配される場合に定冠詞が生起しないという固有の統語的制約をもっているという性質を有しており、冠詞体系が四言語の中で最も未発達であると言える。このため、ゼロ冠詞が極めて高い頻度で用いられることになる。

次に、定冠詞に対して所有形容詞が対応している比率を見ると、非常に興味深い傾向が観察される。ルーマニア語がどの言語と比較しても所有形容詞を用いる傾向が最も低く(対フランス語 - 5.7 ポイント、対スペイン語 - 4.3 ポイント、対イタリア語 - 3.7 ポイント)、続いてスペイン語がルーマニア語以外のいずれの言語よりも比率が低くなっている(対フランス語 - 4.5 ポイント、対イタリア語 - 2.2 ポイント)。これに続くのがイタリア語で(対フランス語 - 8.0 ポイント)、フランス語がこの場合もいずれの言語と比較しても最も高くなっている。すなわち、以下の関係となっている。

ルーマニア語 < スペイン語 < イタリア語 < フランス語

この傾向を、上で述べた冠詞体系の発達の度合いと関連付けて考えると、もっとも発達している言語ほど所有形容詞を用いる頻度が高くなっていると言える。これは、冠詞体系が発達すると、それぞれの決定詞の機能分化が明瞭となるため、それぞれの機能に対応する明示的な形式が用いられるためであると考えられる。つまり、本来定冠詞がになうべき無標の定の性質をもつ名詞句では定冠詞が用いられ、所有の意味を表すべき場面では所有形容詞が用いられるのである。これに対して、冠詞体系がそれほど発達していない言語では、このような機能上の境界がそれほど明瞭ではなく、定冠詞とゼロ冠詞、定冠詞と所有形容詞がそれぞれ共存する状況となっていると言える。まとめると、以下のように図示することができる。



指示形容詞と不定冠詞については、上記二要素ほど有意な差は認められなかった。指示形容詞と定冠詞の間には、指示性の高さという点で相違があり、その機能分化がいずれの言語においても比較的進んでいるためであると言える。不定冠詞についてはいずれの言語においても定冠詞と若干の機能的連続性が存在するために両者の交替が観察されるが、言語間での差はそれほど見られないということであろう。

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 5 件)

藤田 健、イタリア語とルーマニア語の定冠詞に関する対照研究、北海道大学文学研究院紀要、第 158 号、2019、掲載予定

藤田 健、スペイン語とルーマニア語における定冠詞の分布について、北海道言語文化研究、査読有、第 17 号(北海道言語研究会)、2019、pp.81-103

藤田 健、フランス語とルーマニア語における定冠詞の分布について、北海道言語文化研究、査読有、第 16 号(北海道言語研究会)、2018、pp.63-85

藤田 健、スペイン語とイタリア語における定冠詞の分布について、北海道言語文化研究、査読有、第 15 号(北海道言語研究会)、2017、pp.71-93

藤田 健、フランス語とイタリア語における定冠詞の分布について、北海道言語文化研究、査読有、第 14 号(北海道言語研究会)、2016、pp.21-43

[学会発表](計 3 件)

藤田 健 「ロマンス諸語における定冠詞の分布の違い」北海道言語研究会 2019 年(室

蘭工業大学)

藤田 健 「スペイン語とルーマニア語の定冠詞について」北海道言語研究会 2018 年(室

蘭工業大学)

藤田 健 「フランス語と英語の定冠詞について」北海道言語研究会 2015 年(室蘭工業  
大学)

〔図書〕(計 1 件)

加藤重広・佐藤知己編著、情報科学と言語研究、現代図書、2016

(第 8 章 フランス語とスペイン語における定冠詞の分布について pp.173-193)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年：

国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

## 6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8 桁)：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。